ダンサーの「美」についての一考察　―バレエを事例として―

スポーツ文化研究領域
５００８Ａ００１－８　穐村礼美　　研究指導教員　　杉山　千鶴　教授

問題の所在と本研究の目的

近年、バレエに関する専門紙・誌を見ると、柔軟性に富み、美しいプロポーションを持ち、なおかつ秀でた技術を有するバレエ・ダンサーがいかに多く存在しているかを実感する。そのダンサーたちは、振付家の創作した作品を担い表現し、観客は彼らや彼女らを見て、作品や個人の妙技に感動する。その中でもより評価が高く、バレエ団のプリンシパルとして、また公演の中心人物として、常に主役を踊っているバレエ・ダンサーが存在する。このような主役に選ばれたバレエ・ダンサーに多くの観客が惹きつけられるが、観客のまなざしが彼らに見出しているものは何であろうか。

本研究の目的は、松本[1958：198]にしたがい、舞踊の「美」に着目し、観客のまなざしが見出しているものを明らかにすることとする。「美」は舞踊を芸術たらしめる要素であり、素材であるダンサーはそれを生み出しうる媒体のひとつである。そして、観客はそれを見出し、享受する存在であるといえる。そこで、本研究ではバレエ・ダンサーを対象とし、彼ら･彼女らの持つ「美」の検討を行う。バレエは 17 世紀に舞台芸術としての技法と様式が確立し、以後それが守られている。また、その技法と様式を身体にすり込むための基本レッスンが世界共通であり、バレエ・ダンサーはそれをベースにした成果という共通点を持つ存在である。したがって、舞台上の姿のみを比較・検討することが可能であると考えられるからである。以上より、鍛錬や天性といった可視化されたものではない「美」を導きだすことが可能となるであろう。

本研究の方法

本研究は、歴史上の代表的バレエ・ダンサー２名を取り上げ、各々の活躍していた時代を振り返り、歴史的背景から舞踊を芸術たらしめる「美」の考察を行う。次に、世界を股に掛けて活躍している現役バレエ・ダンサー４名を対象とし、観客のまなざしを代弁し、ダンサーを評価したものとして専門紙・誌、または文献に掲載されている批評文を用い、それぞれのダンサーについての記述を分類・考察し、ダンサーの特徴を導き出す。これらを総合して、舞踊を芸術たらしめる「美」に貢献するとされる、ダンサーが持ち、観客のまなざしが見出しているものを明らかにする。

本論

第１章

ロマンティック・バレエの体現者である女性バレエ・ダンサーのマリー・タリオーニ（1804－1884）は、男性が女性へ対して一方的に「美」を課した時代に現れた。そして、ロマン主義が求めた非現実的世界や異国の地への憧れや逃避を体現化した「美」を舞台上で示した存在であった。一方、革新的なバレエ集団「バレエ・リュス」の男性バレエ・ダンサーのワスラフ・ニジンスキー（1890－1950）は、作品を可視化することを課された時代に現れた。そして、自然のままの心とジェスチャーで感情を表現することで、生きる人間の本来の姿に帰った「美」を体現した存在であった。このように時代の状況に応じて、「美」を兼ね備えたバレエ・ダンサーが登場したといえる。

第２章

バレエの歴史を変えたとまで言わしめた超絶技巧をこなすシルヴィー・ギエム（1965－）は、中性的身体といった独自の表現を兼ね備え、観客の感覚を乱し、心を惑わせ、観客を身構えた身体へと導いてい

く。そして、ギエムにしか生み出せない空間を作り出していく。

第３章

日本のバレエ界を担う期待の新星である上野水香（1977－）は、際立って優れたプロポーションを、意識的により引き立てることで、強い印象を残す。そのようにして異様なまでに見せつけることで、観客に人間を超越した身体への憧憬を抱かせる。

第４章

バレエの理想を体現したと評されるウラジミール・マラーホフ（1968－）は、正確で優雅な動きをこなし、両性的な身体を感じさせるが、時には観客を裏切るような姿も見せる。そこから放たれる圧倒的な存在感は、観客の憧憬のまなざしへと繋がる。

第５章

日本が世界に誇るダンサー熊川哲也（1972－）は、観客に高度なテクニックから生み出される迫力と共に緊迫感を与えることで、観客を舞台空間に引きずり込んでいく。そして、生の舞台であるからこそ感じることができる、独特の感覚へと観客を導いていく。

第６章

事例の検討から次のように言える。

①経歴で４名に共通する点として、質の高い教育を受け、バレエの技法と様式が獲得していること、その後のキャリアでの恵まれた舞台と、活動場所を貪欲に求める姿勢が挙げられる。したがって、経歴はダンサーの「美」を作り出す前提条件となると言えるであろう。

②プロポーションの「美」は、ダンサーの「美」となりえる。しかし、それが絶対的な要素にならないことも明らかとなった。

③ダンサーの技術は、難度の高さによって評価されているのではなく、個性をもった表現の中に的確に技術を織り込むことで、観客が憧れを抱くほどのダンサーの「美」として認識されると考えられる。

④作品に貢献するとされるダンサーの「美」は、作品の解釈を正確に伝え踊るという点で突出しており、ダンサー自身がそのことを熟知し、発揮しているのである。

⑤ダンサーの技能は、身体的特徴・技術・作品への貢献といった特徴が相互的に作用し、固有のものとして評価されていることが考察された。そして、それが個性として発揮され、観客はそこに羨望のまなざしを注ぎ、「美」として認識すると考えられる。

このようにしてダンサーの特徴より導き出された「美」の要因の中には、他の芸術とは異なった特有の感覚が含まれることが考察された。それらは、経験的感覚を超越することで一時的に負の感覚を感じさせ、それが憧憬や羨望と相まって、観客に＜超の感覚＞として受容され、認識される「美」である。これらは、日常的レベルにおいては容易に「美」と結びつくものではない。しかし、舞踊という芸術においては、それを担うダンサーによって、未経験の感覚として認識されるのではないか。また、人間を超越した身体への羨望を伴い、さらに「美」として認識されうるのではないだろうか。そして、時代とともに多様化し、認識される「美」は、新たなダンサーの誕生によってさらに変容していくのであろう。

本研究の結論

本研究より、ダンサーによって経験的感覚を超えたものとして認識される、舞踊を芸術たらしめる「美」となる複数の要因が明らかとなった。その中で突出しているものは、＜超の感覚＞である。これは、舞踊がダンサーという身体を用いる芸術であるがゆえに、認識することができる要因である。さらに、舞踊を担うダンサーと観客は同じ身体を持っている。そして、観客の身体は舞台空間という、日常生活から離れた特別な環境に置かれている。それゆえに、観客は舞台上のもの（ダンサーの超越した身体を含む）を受け入れることができ、よりその身体に対して憧憬や羨望を抱くのではないかと考えられる。このような舞踊特有の＜超の感覚＞を与えるダンサーを目の当たりにした観客の感覚は、彼ら・彼女らへの羨望を伴った舞踊の「美」を認識するまなざしとして転化されていくのではないだろうか。